

あ と が き

この事業年報は、新しい法人「公益財団法人」になった第1年目(2012<平成24>年度)の活動をまとめたものである。

この機会に、本会がスタートした頃を振り返って考えてみたい。本会の前身は、1949(昭和24)年3月31日、東京都知事に認可された財団法人東京寄生虫予防協会である。

戦後間もない頃の日本では、回虫、鉤虫をはじめとする土壌伝播の寄生虫が蔓延し、人々の健康を著しく阻害していた。当時の国民の70~80%がこれらの寄生虫に侵されており、東京都内では回虫70%、鉤虫25%の感染率であった。そのため、寄生虫の撲滅と健康教育を目的として設立された団体である。

運動を始めてすぐに関連の各団体から大きな反響があった。役職員の懸命な努力と学会の指導、関係者の協力などにより、活動を始めてから5~10年という驚くべき早さで寄生虫卵保有者は激減し、寄生虫0%の時代が予測されるまでになった。そのため私たちは、次の時代にどんな仕事をして社会に貢献できるかを真剣に考え始めた。

学校・企業、町村などから糞便を集めて検査するのが毎日の仕事であったが、寄生虫卵保有者が少なくなったので、その便を利用して何か人々に役立つ仕事ができないか議論を重ね、修学旅行時の学童や給食作業員の腸内細菌検査などが次の仕事の対象に上った。

また、働く人の健康管理として、日本人に多いと言われていた胃がん検診に便潜血反応を利用できないかと考え、専門家との意見交換の結果、成人を対象とした便潜血反応の検査を始めた(1958~1970年)。

1年間で約10万人の検査を行った結果、胃がんは見つかったが進行した大きなものが多く、早期発見とは言えなかった。その後、胃がん検診はレントゲン検査の時代へと変わっていくことになる。その間に団体の名称も東京都予防医学協会へと変更された(1967年)。

その後は、母子保健、学校保健、職域保健などの事業にも取り組み、今日まで健(検)診と研究、健康教育活動などを続けてきた。

この間、社会のあり様も大きく変化してきた。長い間、国民の死亡原因の3位までは、がん、心疾患、脳血管疾患だったが、1980年代より脳血管疾患の死亡数が減少傾向となり、高齢化の影響で肺炎による死亡者数が上昇して2011年には3位になり、3大死因は、がん・心疾患・肺炎となってきた。

また今までは、日本人の長寿の証として「平均寿命」の長さが大きく取り上げられてきたが、これからの少子高齢社会を支えていくためには、人々が健康で長生きできる期間を表す「健康寿命」とその延伸が重要な課題になってきている。

わが国では2人に1人ががんに罹り、3人に1人ががんで死亡すると言われていている。がんの予防が可能であるのであれば、われわれ予防医学を運動の中心におく団体は、全力を上げてがん対策に邁進すべきであろう。

今年の事業年報も、多くの先生方のご協力で完成することができました。先生方には、ご多忙にもかかわらず、ご面倒な数字の分析や解析に取り組んでいただき、本当にありがとうございました。心より御礼申し上げます。

2014年3月

公益財団法人東京都予防医学協会
専務理事 山内邦昭